



「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」実践の意義と課題：「のびやかスペースあーち」利用実態調査単純集計からの考察(2)

伊藤, 篤
津田, 英二
寺村, ゆかの
稲本, 恵子

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 10(1):93-108

(Issue Date)

2016-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009721>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009721>



「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」実践の意義と課題 －「のびやかスペースあーち」利用実態調査単純集計からの考察（2）－

Meanings and Challenges of the Practice for Building an Inclusive Community through Child and Family Support: the second survey for the consumers of various services offered by a university satellite plant

伊藤 篤* 津田 英二* 寺村 ゆかの** 稲本 恵子***
Atsushi ITO* Eiji TSUDA* Yukano TERAMURA** Keiko INAMOTO***

Summary : This monograph is the results of simple tabulation and cross tabulation based on the complete enumeration conducted for all the service/program consumers of the satellite venue attached to Action Research Center for Human & Community Development, Graduate School of Human Development & Environment, Kobe University. The main objective of this satellite project is to build an inclusive community through practicing various initiatives for enhancing wellbeing of local families. When five years passed since the establishment of this plant, we once conducted a survey, and this is the second one taken just after the passage of ten years. Focused questions were the followings: (1) Do the consumers really obtain what they initially asked for? (2) Why do the consumers start and/or quit using the venue? (3) How does the difference of using pattern relate to their learning and their satisfaction? (4) How much is the consumption useful to their improvement of life? (5) How does the consumption correlate to their social capital? The obtained results were discussed from the standpoints of realization of inclusiveness, life career, and support of parenting.

Key Words : 共生のまちづくり 地域子育て支援拠点事業 エンパワメント ライフ・キャリア

1. はじめに

本稿は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設「のびやかスペース あーち」（以下、「あーち」と略記）の設立10周年の節目に実施した利用者対象の質問紙調査の結果をまとめたものである。設立5周年にも、同様の調査を実施し報告も行っている（津田・伊藤・寺村・井手2012）ので、それも参照しながら、「あーち」における研究科の支援活動を全体的に評価することが、本論文の目的である。この調査は、「あーち」開設から5年・10年が経過したそれぞれの時点で、「あーち」のコンセプトがどこまで実現できているのか、また、その意義や効果はどのようなものであるのかといったことを探るために実施した悉皆調査である。今回は、10年調査の単純集計およびクロス集計のみを扱い、より複雑な統計的分析、自由記述の整理・分析、さらに質問紙とほぼ同時期に実施したインタビュー調査に基づいた検討、5年調査との詳細な比較検討などは別稿に委ねる。

なお、「あーち」のコンセプトは、既にいくつかの公刊物で紹介し検討しているので、ここではごく簡単に触れるだけに留めておく。また、「あーち」についての詳細な説明やコンセプトの考察等については、本論文の末尾に、「あーち」に関連する文献をまとめて掲載しているので、それらを参照いただきたい。

大学と自治体が連携した子育てやまちづくりをテーマとした事業は、「あーち」設立の2005年当時は、「あーち」が先駆的でユニークなモデルケースであった。現在では同様の事業が全国で数多く進行している。自治体には、少子高齢化や地域の人口減少の問題といった深刻な政策課題がある一方で、大学の側も地域貢献や特色のある取り組みが大学評価の指標となってきた。さらに、近年の大学教育において、学生たちが受動的学習を脱して能動的にさまざまなフィールドで学ぶ形式のアクティブ・ラーニングが推奨されており、このことも、さらに大学と自治体、大学と地域の連携を推し進めていく要因になっていくものと思われる。

こうした状況の中で、「あーち」は、開館中であればいつでも誰

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科・教授

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科・研究員（教育研究補佐員）

*** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科・後期課程研究生（教育研究補佐員）

（2016年3月31日 受付）
（2016年7月1日 受理）

でも経済的負担なく立ち寄ることができる条件を整えており、気軽に遊んだり談笑したりする場を提供している。それと同時に、多様な課題に対応する人材やプログラムの配置や小グループ活動の支援などもおこなっている。住民に広く開かれた「ひろば型」実践であると同時に、多様な社会的課題（ことさら「共に生きる」というテーマ）に開かれたプログラムを組み込んでいるという点に、「あーち」の特色があるといえよう。5年前に実施した調査では、利用者の多くが子どもを遊ばせてのんびりできる場、多様な関係を形成する拠点として評価していたなど、「あーち」の特徴が如実に表れていた。その一方で、利用者が学術研究の成果を享受できる場を構築したわけでもないし、私たちも特定の課題に集中して取り組むということもしてこなかった。また、大学のキャンパスから離れていることもあって、学生が日常的に活躍する機会の提供も限定されていた。

こうした「あーち」の実態を踏まえて行った今回の調査の基本的な視点は、(1) 利用者が本施設に何を求め、本施設の利用からどのような満足（不満足）を得ているか、(2) 利用者が本施設を利用し始めた背景・本施設を利用しなくなった背景は何か、(3) 利用形態の違いと利用者の学び・本施設への満足度とにどのような関係があるか、(4) 本施設の利用が利用者の生活向上にどの程度役立っているか、(5) 本施設の利用と利用者の社会関係資本の広がりとはどのような関係にあるか、であった。こうした視点のうち、本稿では、得られたデータに関する比較的単純な集計によって明らかになった結果を提示し考察する。

2. 方法

(1) 研究フィールド

本調査の研究のフィールドは、2005年9月に、神戸大学大学院人間発達環境学研究科（当時は総合人間科学研究科）が、研究・教育・社会貢献の充実を目指して立ち上げた大学外のサテライト施設（名称は「のびやかスペースあーち」）である。神戸市との連携のもと、灘区役所旧庁舎をリモデルし、「子育て支援をきっかけとした共生のまちづくり」の実践を展開してきた。筆者らは、実践を開始して5年が経過した時点で、主に利用者を対象にした調査（津田・伊藤・寺村・井出 2012）を実施したが、本研究は、施設開設10年を経過した時点で、再度、この実践の意義と課題を明確化するため実施したものである。本稿では、この調査内容のうち単純集計結果について報告する。

(2) 調査対象者

この施設では、利用希望者に対して、「おやこ会員（子どもが就学前）」「おとな会員（高校生以上）」「こども会員（小学生・中学生）」としての会員登録を依頼している（基本的に、登録も利用も無料である）。この登録情報にある住所を利用して、開設当初から2015年6月までに登録した「おやこ会員」と「おとな会員」すべてに、調査用紙を郵送した。「おとな会員」の中には、この施設でプログラムを担当するリーダーやこの施設にボランティアとしてかかわる学生・院生・社会人などが含まれる。送付数は3,626件である。調査用紙の発送は、2105年8月18日であり、同年11月末日までに返送のあったものを、後述する分析対象データとした。

(3) 調査内容

調査内容は、基本的に「5年調査（津田・伊藤・寺村・井出 2012）」を踏襲しているが、修正・追加点もいくつかある。ここでは、単純集計に用いた質問項目（すべてに選択肢を設けている）のみを以下に記す。

- A. 回答者の属性として、性別・年齢・居住地・利用する立場・利用開始時および現在の就業状況を尋ねた。
- B. 現在利用しているかどうかを尋ねた上で、現在利用していない場合は、利用を止めた理由を尋ねた。
- C. 施設のことを知ったきっかけについて尋ねた。
- D. 施設を利用し始めた当初の期待の内容とその程度を尋ねた。
また、これにはほぼ対応する形で、施設利用によって、それらの期待がどの程度実現されたかを尋ねた。
- E. 育児中の本施設利用者に対し、子どもの発達と施設利用との関連について尋ねた。
- F. この施設で提供されているサービスやプログラムを列挙し、それらのうち、利用したことのあるものを選択するよう求めた。
- G. 施設利用によって、どのような社会問題に興味・関心が高まったか、その程度を尋ねた。
- H. 他の本施設利用者との関係性および自分自身の生活（孤独感、家計、ストレス、援助希求）について尋ねた。

(4) 分析対象データ

上記の11月末までに返送された調査用紙は432件であった。宛先に該当者がいない、いわゆる未達数が987件あった。すべてが有効な回答であったので、この432件を分析対象データとした。この987件を除いて算出した有効回収率は、16.4%（432÷2,639）であった。分析には、IBM・SPSS（Version 22.0）を使用した。

(5) 倫理的配慮

調査実施に先立って、神戸大学大学院人間発達環境学研究科・研究倫理審査委員会に研究内容を申請し、2015年7月に承認（No.151）を得ている。また、倫理的配慮にかかわる事項（協力は任意である・個人が特定されないこと・答えたくない質問には答えなくてもよいこと）を記載した「調査協力をお願い」と題した文書を質問紙郵送時に同封した。

3. 結果と考察

(1) 回答者の属性

性別と年齢に関する分析結果を表1に示す。回答者のうち女性が98.1%を占めている。また、女性の年齢分布を算出した結果、20歳代が30名（7.2%）、30歳～34歳が92名（22.0%）、35歳～39歳が

表1 回答者の属性（性別と年齢）

性別	回答者総数	年齢回答者	平均年齢 (標準偏差)	年齢レンジ
女性	424	419	38.7歳 (7.77)	21歳～78歳
男性	5	5	37.2歳 (14.10)	24歳～59歳
不明	3	0	—	—
合計	432	424	38.6歳 (7.94)	21歳～78歳

【注】女性の年齢の最頻値は32歳・35歳・37歳（度数は28名）、中央値は38歳である。

129名（30.8%）、40歳～44歳が103名（24.6%）、45歳～49歳が42名（10.0%）、50歳代が11名（2.6%）、60歳以上が12名（2.9%）であった。40歳代の女性が約35%を占めているが、これは近年の晩婚化・晩産化を反映した結果である。50歳代以上の女性は、祖母の利用が含まれているからだと考えられる。

次に、居住地に関する分析結果を表2に示す。施設のある灘区住民が80%を超えており、灘区の東西に隣接する東灘区および中央区の住民が約12%を占めている。その他の内訳を見ると、神戸市内の近隣区と兵庫県内の近隣都市からの利用も一部あることが分かる。さらに遠隔地の場合は、里帰り出産をしているケース（したがって、本施設の利用はごく短期間となる）であることが推測できる。

さらに、どのような立場で施設を利用しているのかに関する分析結果を表3に示す。育児中の保護者という立場での利用がもっとも多く、90%以上を占めている。また、支援をする側に相当するプログラムリーダーおよびボランティアという立場での利用は約6%となっている。「その他」の具体的な回答としては、孫を連れてきた祖母として（3名）、大人向けの書道プログラムの参加者として（2名）、利用者のガイドヘルパーとして（2名）、学童保育所や学校からの参加者として（2名）、居場所づくりプログラムに参加する子どもの保護者として（1名）、劇団（演劇プログラム）のメンバーとして（1名）、地域の支援者として（1名）などであった。

表2 回答者の属性（居住地）

居住地	人数	比率(%)
灘 区	351	81.3
東灘区	30	6.9
中央区	21	4.9
その他	30	6.9
合 計	432	100.0

【注】「その他」は、西宮市5名、須磨区・西区・北区・垂水区各3名、尼崎市・宝塚市・芦屋市・加古郡・高砂市・京都市・香川県・大阪府各1名、関東方面3名、未記入2名である。

表3 回答者の属性（利用する立場）

利用する立場	人数	比率(%)
育児中の保護者として	397	91.9
自分は利用せず、子どもだけ利用	13	3.0
ボランティアとして	21	4.9
相談員として	0	0.0
プログラムのリーダーとして	5	1.2
その他	16	3.7
合計	452	—

【注】比率は回答者総数である432名を分母として算出している。452名との差（20名）は、2つ以上の立場で「あーち」を利用していた・していることを示す。

利用開始時および現在の就業状況に関しては、2つの回答をクロス集計した。その結果を表4に示す。利用開始時に学生であった者10名のうち、1名は学生、1名は専業主婦、8名は就業して

いる。この8名のうち5名はフルタイムの仕事に就いている。利用開始時において最も多かったのが専業主婦（夫）247名（回答者全体の57.7%）であり、このうち170名（68.8%）がそのまま専業主婦（夫）に、54名（21.9%）がパートタイムの仕事に就いている。利用開始時に次に多かったのがフルタイムの育児休業中の者126名（回答者全体の29.4%）であり、このうち74名（58.7%）が同じフルタイムに戻っており、38名（30.2%）は育児休業を継続中である。

以上、回答者の属性に関する分析から、本施設の利用者のほとんど（約98%）が女性であること、同時に、そのほとんど（約92%）が育児中の母親であると言える。また、回答者の約6%が支援者（プログラムリーダーやボランティア）として本施設を利用している。また、利用開始時には、専業主婦（夫）が約60%、フルタイム・育休中が約30%という状況が、回答時点では、専業主婦（夫）が約40%、フルタイム・就業中が約25%、パートタイム・就業中が約20%という状況に移行している。回答者の中には、すでに利用を止めた者と現在利用中の者が混在しているものの、この傾向から、フルタイムの者の多くは子どもが一定の年齢に達したら元の職（フルタイム）に復帰していること、専業主婦であった者のうち1/3程度はパートタイム職についていることがうかがえる。さらに、専業主婦であった者がフルタイムの職についた比率は6.9%（17÷247）であり、専業主婦であった女性が正規職に就くことの難しさが明らかとなっている。

表4 利用開始時と現在の就業状況とのクロス表（単位：人）

		現 在 の 状 況							
		学生	F・On	F・Off	P・On	P・Off	S	その他	合計
利用開始時の状況	学生	1	5	1	2	0	1	0	10
	F・On	1	10	0	3	0	2	1	17
	F・Off	1	74	38	6	0	5	2	126
	P・On	0	2	0	3	0	2	0	7
	P・Off	0	2	0	8	3	2	0	15
	S	1	17	0	54	4	170	1	247
	その他	0	1	0	0	9	0	5	6
合計		4	111	39	76	7	182	9	428

【注】表中の「F・On」はフルタイム・就労中、「F・Off」はフルタイム・育休中、「P・On」はパートタイム・就労中、「P・Off」はパートタイム・育休中、「S」は専業主婦（夫）を指す。

これらの結果は、この施設が、就園前（3歳未満）の子どもと親を主たる対象とする「地域子育て支援拠点事業」の運営主体でもあることと大きく関連していると言えよう。なお、回答者の属性について、前回の5年調査（津田・ほか2012 以下「前回調査①」と記す）の結果を、今回調査した属性と対比できるものを選んで示すと、女性が96.8%、育児中の母親88.9%、プログラムリーダー・ボランティア7.9%、灘区住民78.9%（東灘区と中央区は12.9%）となっており、利用者層にほとんど変化がない。年齢については、前回調査①では、男女込みの平均が36.7歳（標準偏差7.9）であり、約2歳程度、今回のほうが高くなっているが、こ

れは、過去の利用者すべてを調査対象にしたことが影響していると考えられる。

(2) 現在の利用の有無と利用を止めた理由

回答者(432名)のうち、「現在も本施設を利用している」者は152名(35.2%)、「すでに利用を止めている」者は280名(64.8%)であった。利用を止めている場合には、その理由をその他も含む14の選択肢から、自分に当てはまるものを選択(複数選択可)するよう求めた。その分析結果を表5に示す。被選択総数が548件あったことから、回答者1名あたり平均して約2項目が選択されている。

表5 利用を止めた理由

番号	理由	人数	比率(%)
1	就職・結婚などの大きなライフイベントをきっかけに	29	10.4
2	仕事(家庭内・外)や勉強などで多忙になった	105	37.5
3	開館時間・曜日などが自分たちの生活パターンに合わなくなった	27	9.6
4	引越し等で遠くなり利用に不便になった	23	8.2
5	ずっと利用し続けるには遠く・不便だった	47	16.8
6	子どもが保育所・幼稚園などに通い始めるのをきっかけに	163	58.2
7	子どもが小学校に通い始めたことをきっかけに	69	24.6
8	子どもが成長して「あーち」に行きたがらなくなった	18	6.4
9	利用していたサービス・プログラムをもう必要でなくなった	20	7.1
10	提供されるサービス・プログラムに満足できなかった	6	2.1
11	すでにできあがっている親の輪に入りにくいと感じた	16	5.7
12	「あーち」のあり方に疑問を感じた	0	0.0
13	他の利用者と価値観が合わないと感じた	1	0.4
14	その他	24	8.6
合計(件数)		548	—

【注】比率を算出する際の分母は、利用を止めた280名である。

最も被選択率が高かった項目は、「子どもの保育所や幼稚園への入所・入園(58.2%)」であった。次に多く選択されたのは、「利用者自身が仕事・勉強などで多忙になった(37.5%)」である。それに続いて、「子どもが小学校に入学した(24.6%)」ことがきっかけになっている。この3つの理由は、前回調査①での被選択率(それぞれ43.6%、20.9%、15.0%)と同じ順になっているものの、いずれも10ポイント以上高くなっている。この結果は、近年、出産後の女性の(再)就業率が高くなっていること、それに伴って保育所利用が増加していることの反映だと推測される。一方で、小学校入学を機に利用を止めるケースでは、本施設が必ずしも3歳未満の子とその親のためだけの居場所ではないという認識が、利用者の間に広がってきており、子どもの就学前まで利用を継続する層も一定数いることをうかがわせる。

また、前回調査①では、「引越えし」を理由にした者が11.2%いたのに対し、今回は8.2%と若干減少している。これは、今回調査

が、過去5年間の利用者を対象とした前回調査とは異なり、過去10年間と期間を広げているため、郵便局の「転送」サービス期間を過ぎた家庭には質問紙そのものが届いていない(今回調査では未達が多かった)影響であると考えられる。「自宅が遠方」という理由は、今回は16.8%、前回は8.1%となっており、利用者の居住範囲が広がっていることをうかがわせるとともに、自宅との距離は継続利用にとって大きなハードルであることが分かる。「就職・結婚」という理由に関しては、今回は10.4%、前回調査①では9.3%となっており、大きな変動は認められない。

「その他」として記載された理由は、選択肢に該当するもの・理由の記載になっていないものも含まれていたが、それらを除いて主なものを抜きだし整理すると、「乳児や幼児の利用が多く成長した自分の子どもが遊ぶ場として適切ではなくなったから(6名)」「子どもが成長し公園や児童館など他の場所に行くようになったから(4名)」「2人目が生まれるなど育児が多忙になったから(4名)」となる。なお、「自分に十分なネットワークができたから(1名)」や「成長したわが子にとって戸外での活動のほうが望ましいと考えたから(1名)」といった、親としての成長や子どもの発達を踏まえた積極的な回答も見られた。

(3) 施設を知った場所やきっかけ

この質問項目についても、複数選択可とした。結果を表6に示す。被選択総数は640件あり、回答者1名あたり平均して約1.5項目が選択されている。

被選択率が最も高い項目は「友人・知人(38.7%)」であり、次いで「区役所(30.1%)」となっている。前回調査①では、順に41.2%と28.8%であるので、大きな変動は見られず、口コミの効果および灘区役所との連携(広報面)の大きさがうかがえる。

「新生児訪問」も比較的高い被選択率を示している(17.4%)が、前回調査が9.7%であったことを考えると、灘区役所が提供する母子保健サービスとの広報面での連携が深まっていることが看取できる。「産婦人科クリニック」「児童館」「子育てサークル」に関しては「前回→今回」がそれぞれ、13.1%→16.0%・5.6%→9.5%・4.9%→6.5%となっており、大きな変化は認められないものの、いずれも増加傾向にある。このことは、広報面における

表6 施設を知った場所やきっかけ

番号	契機	人数	比率(%)
1	「あーち」や神戸大学のホームページで	65	15.0
2	SNS(FacebookやMixiなど)などのサイトで	0	0.0
3	産婦人科のクリニックで	69	16.0
4	新生児訪問で	75	17.4
5	区役所(乳幼児健診、子育て支援課の窓口など)で	130	30.1
6	児童館で	41	9.5
7	子育てサークルで	28	6.5
8	家族・親戚から	20	4.6
9	友人・知人から	167	38.7
10	その他	45	10.4
合計(件数)		640	—

【注】比率を算出する際の分母は、回答者総数432名である。

長年の継続的な地域資源との連携が少しずつ効果をもたらしていることをうかがわせる。

なお、前回調査①で被選択率がそれほど高くなかった「ホームページ（7.3%）」が、今回は15.0%と倍増している。これは、インターネットの普及（利用層の増加）による影響と考えられるが、当研究科の情報担当部局および本施設のホームページ担当者の労によって導かれた成果でもあると思われる。

「その他」として記載された内容を整理すると、「近所に住んでおり通りがかりに建物・看板などを見て知った（11名内1名はバスの中から看板を見た）」「当研究科内の教員やスタッフの紹介やポスター・チラシ等を通して知った（7名）」「神戸大学保健学科の教員から障害児と保護者のためのプログラムを紹介された（4名）」「神戸市・保育所（保育士さんの紹介を含む）・灘区役所の案内等を見て知った（4名）」「個人的な知り合いから勧められた（4名）」「本施設が発行した案内やチラシを見て知った（3名）」「JRの駅に設置された情報誌「とことことん」を見て知った（2名）」となる。

（4）施設利用開始時の期待度と利用後の満足度

本施設を利用しようと思った目的（期待）として22項目を設定し、回答者には、それらの項目が、自分にどの程度あてはまるかを、「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4つの選択肢から選ぶように求めた。順に4点～1点を与えた。また、自己実現あるいは生涯学習の場として本施設でプログラム提供にかかわっている人、子ども連れで本施設を利用しているわけではない人もいることを考慮し、「該当なし」という選択肢も設定した。各項目の回答者数（未記入および該当なしの選択者を除いた数）と各項目の平均値・標準偏差を算出した結果を表7に示す。

平均値が3.5を超えている項目は、非常に多くの利用者が期待する内容だと言える。それらを列挙すると、「子ども連れで楽しく遊ぶ」「子ども連れでゆっくりと時間を過ごす」「子ども行動面・知的な面・対人面に良い」「子どもの暮らしをより良いものにする」「子育てに関する情報・ヒントなどを得たい」である。

平均値が3.0以上3.5未満の項目も、比較的多くの利用者が利用開始時に期待する内容だと考えられる。それらは、「自分の子育てを充実させたい」「育児について同じ関心をもつ仲間と知り合いたい」「子育てに関する具体的なアドバイスを得たい」「子どもの友だちを見つけてやりたい」「自分の育児仲間をもちたい」である。

平均値が2.0未満の項目は、ほとんどの利用者があまり期待していない内容である。それらは、「家事・育児や仕事以外のことを学びたい」「他者や社会の役に立ちたい（社会参加したい）」「自分の今後のキャリアについて考えてみたい」である。いわゆる地域貢献や生涯学習の場として本施設を利用しようとする者、キャリアに関する学びを期待して利用し始める者は、非常に少ないということになる。そこで、これら3項目に関する肯定的回答者（「よくあてはまる」「ややあてはまる」の選択者）の人数と比率を算出してみると、「家事・育児や仕事以外のことを学びたい」は101名・25.6%、「他者や社会の役に立ちたい」は66名・17.1%、「自分の今後のキャリアについて考えてみたい」は35名・9.2%となっている。ここから、育児中の保護者も含めて、利用者の4人に1人は

表7 施設利用開始時の期待度

番号	期待する項目	人数	平均値	標準偏差
1	多様な境遇・年齢の人と知り合いたい	402	2.53	0.88
2	自分の狭い視野をもっと広げたい	406	2.56	0.89
3	他者や社会の役に立ちたい（社会参加したい）	387	1.88	0.80
4	不安や悩みの相談にのってもらいたい	404	2.67	0.89
5	音楽・アートなど創造的・文化的活動がしたい	398	2.41	0.93
6	自分の暮らしを豊かなものにしたい	400	2.62	0.85
7	自分の今後のキャリアについて考えてみたい	381	1.65	0.71
8	家事・育児や仕事以外のことを学びたい	394	1.96	0.92
9	大学の情報や取組に触れられると思った	392	2.09	0.89
10	プライベートなことを話せる友だちがほしい	404	2.59	0.90
11	家庭から離れてリフレッシュしたい	399	2.56	0.98
12	地域でのつながりを豊かにしたい	407	2.73	0.85
13	子ども連れで楽しく遊びたい	405	3.77	0.51
14	子ども連れでゆっくりと時間を過ごしたい	402	3.62	0.60
15	育児について同じ関心をもつ仲間と知り合いたい	402	3.35	0.82
16	子育てに関する情報・ヒントなどを得たい	404	3.51	0.73
17	子育てに関する具体的なアドバイスを得たい	401	3.29	0.83
18	子どもの行動面・知的な面・対人面に良いと思った	402	3.59	0.64
19	子どもの暮らしをより良いものにしたい	401	3.56	0.69
20	子どもの友だちを見つけてやりたい	400	3.26	0.88
21	自分の育児仲間をもちたい	397	3.19	0.91
22	自分の子育てをより充実させたい	400	3.46	0.73

何らかの学びの場として、6人の1人は自分が地域貢献できる場として、10人に1人は自分のキャリアを考える機会を与えてくれる場として期待していることがうかがえる。

次に、こうした目的（期待）に対応させる形で、本施設を利用することで、それらがどの程度実現できたのかを表現する26項目を設定し、それらの項目が自分にどの程度あてはまるかを、「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4つの選択肢から選ぶよう回答者に求めた。順に4点～1点を与えた。また、利用開始時の期待度の時と同じように、「該当なし」という選択肢も設定した。各項目の回答者数（未記入および該当なしの選択者を除いた数）と各項目の平均値・標準偏差を算出した結果を表8に示す。

非常に多くの利用者が期待していた項目について、その期待度と利用後の満足度とを比較すると（期待度平均→満足度平均）、「子ども連れで楽しく遊ぶ」は3.77→3.69、「子ども連れでゆっくりと時間を過ごす」は3.62→3.58、「子ども行動面・知的な面・対人面

に良い」は3.59→3.05、「子どもの暮らしをより良いものにする」は3.56→3.16「子育てに関する情報・ヒントなどを得る」は3.51→3.32となっており、すべての項目で当初の期待ほど満足感を得られていない結果となった。特に、子どもの発達や子どもの暮らしについては、得点の低下が大きくなっている。前回調査（寺村 2012、以後「前回調査②」とする）においても、「子どもの発達促進」や「子どもの暮らし向上」に関しては期待度よりも満足度が低くなっており、さらに今回は、前回調査②で見られた「親子で楽しく遊ぶ」「親子で長時間過ごす」における平均値の上昇が

表 8 施設利用後の満足度

番号	期待する項目	人数	平均値	標準偏差
1 a	多様な境遇・年齢の人と知り合えた	415	2.72	0.88
1 b	多様な境遇・年齢の人との相互理解が深まった	413	2.41	0.86
2	自分のことで精いっぱいだったが、視野を広げられた	408	2.67	0.82
3	他者や社会に役立つこと（十分な社会的活動）ができた	379	1.78	0.79
4	相談を通して、不安が和らいだり悩みが解決したりした	398	2.73	0.92
5	音楽・アートなど創造的・文化的活動が楽しめた	395	2.46	0.98
6	自分の暮らしが豊かになった	403	2.69	0.85
7	今後のキャリアの重ね方についてのヒントが得られた	386	1.81	0.80
8	家事・育児や仕事からでは学べないことを学べた	396	2.55	0.92
9 a	大学の情報や取組を知識として得て自信がついた	390	1.98	0.84
9 b	学ぶことの楽しさを知り、いつかまた学校等で学びたい	381	1.82	0.82
10 a	「あーち」以外でも交流できる人と知り合えた	399	2.51	1.11
10 b	価値観の合う人と知り合えた	400	2.45	1.02
11	家族内や親族間の関係のあり方が良くなった	389	2.03	0.79
12	友だちや支援者とのネットワークが充実した	397	2.33	0.93
13	子ども連れで楽しく遊ぶことができた	407	3.69	0.57
14	子ども連れでゆっくりと時間を過ごせた	403	3.58	0.62
15 a	育児に関する同じ関心をもつ仲間と知り合えた	399	3.03	1.00
15 b	人によってそれぞれ育児の悩みがあることが分かった	402	3.24	0.89
16	子育てに関する情報・ヒントなどを得ることができた	403	3.32	0.78
17	子育てに関する具体的なアドバイスを得られた	398	3.03	0.92
18	子どもの行動面・知的な面・対人面が促された	404	3.05	0.85
19	子どもの暮らしがより豊かになった	402	3.16	0.78
20	子どもに仲の良い友だちができた	396	2.63	1.02
21	お互いに高め合える育児仲間をもつことができた	395	2.65	1.05
22	自分の子育てに見通しや自信をもてるようになった	396	2.79	0.90

見られていない。これらの結果は、本施設が大人の利用者へのサービスに偏っていることへの警鐘であると重く受け止めなければならない。

次に、期待度において平均値が3.0以上3.5未満の項目につて、同様の比較をすると（期待と満足が同じ表現の項目のみ）、「育児について同じ関心をもつ仲間と知り合う」は3.35→3.03「子育てに関する具体的なアドバイスを得る」3.29→3.03「子どもの友だちを見つける」3.26→2.63となっており、当初の期待ほど満足感を得られていない結果となった。ここでも、子どもに関する項目の平均値の低下が大きい。なお、「自分の子育てをより充実させたい」は「自分の子育てに見通しや自信をもてるようになった」という限定的な表現に、「自分の育児仲間をもちたい」については「お互いに高め合える育児仲間をもつことができた」という条件付きの表現に変えているため、平均値が低下している。

一方、期待度の平均値が2.0未満であった項目について、同様の比較をすると、「家事・育児や仕事以外のことを学ぶ」は1.96→2.55、「他者や社会の役に立つ（社会参加する）」は1.88→1.78、「自分の今後のキャリアについて考える」は1.65→1.81となっており、家事・育児や仕事に関連しないことがらを学べた利用者と自分のキャリアについて考える機会を得た利用者が増加したことがうかがえる。これらは、主に利用者同士の交流、いわゆるインフォーマルな学びが生じていたことを示唆する結果だと考ええられる。

なお、上記以外の項目で、その平均値が期待度よりも満足度において増加したものを列挙すると、「不安や悩みの相談にのってもらう」「音楽・アートなど創造的・文化的活動を楽しむ」「自分の暮らしを豊かにする」となる。いずれの平均値も微増ではあるが、この結果は、本施設の特長である専門相談員の配置や音楽・アート系プログラムの多さに起因するものと思われる。

（5）子どもの発達と施設利用との関係

本施設では、本学人間発達環境学研究科の教員や本学保健学研究科の教員などが主宰する障害のある子どもやその家族を対象としたプログラムが提供されている。そこで、子育て中の利用者に対して、子どもの発達と本施設の利用との関係を6つの選択肢から選ぶように求めた。その結果を表9に示す。

表 9 子どもの発達と本施設の利用との関係

番号	選択肢	人数	比率(%)
1	子どもの発達は順調だが「あーち」を利用した	351	86.2
2	子どもの発達に問題があると感じたこと「あーち」の利用とは関連がある	26	6.4
3	子どもが障害の判定を受けていることと「あーち」の利用とは関係がある	16	3.9
4	子どもと一緒に「あーち」を利用したことはない	1	0.2
5	この質問には答えたくない	3	0.7
6	その他	10	2.5
合計（件数）		407	100.0

【注】432名中25名は、子どもと一緒に本施設を利用する「おやこ会員」ではないため、回答していない。

育児中にもかかわらず保護者が単独で本施設を利用した者は1名のみであった。子どもの発達に問題があると感じていた保護者と子どもが障害の判定（診断）を受けていた保護者とを合わせると10.3%となり、10家庭のうち1家庭が、子どもの発達に関する課題を抱えていることをきっかけにして、本施設を利用し始めたことになる。前回調査①において、「発達に順調である」が87.7%、「障害の判定を受けている」と「発達に問題がある・問題があると感じた」が合わせて10.3%となっており、子どもの発達と本施設の利用との関係については、この5年間でほとんど変動がないと言える。

「その他」として記述された主な回答は、「子どもの発達に問題があることと本施設の利用とは関係がない（4名）」「発達に問題があると（他者から）言われて本施設を利用した（1名）」である。つまり、発達に関する問題はあったものの、それが本施設利用の理由ではないとする回答と、発達に問題があると言われ本施設の利用を勧められたとする回答ということになる。なお、残りの5名の回答は、この問いに対する適切な回答ではなかった。

（6）サービス・プログラムの利用状況

本施設では、様々なサービスやプログラムを利用者に対して提供している。今回の調査では、調査対象を過去10年間の利用登録者としているため、開設以後の5年間（2005年9月～2010年8月）には提供していたが、それ以降の5年間（2010年9月～2015年8月）には提供していないサービス・プログラム名（表10内の番号に「*」をつけている）も選択肢の中に含めている。一度でも利用したことにあるものを選択するように（複数選択可）求めた結果を表10-A～表10-Kに示す。なお、比率を算出する際の分母は、回答者総数432名である。なお、選択肢の中にないプログラムを記述する欄を「Lその他」として設けた。

本施設で、地域子育て支援拠点の基本事業として力を入れているのが、「ひろば（ふらっと）の提供」と「ひろばでの相談対応」である。利用者の約8割がひろばを利用しており、約4分の1がひろばでの相談を利用している。ひろば利用者のうち相談を利用している比率を算出すると29.4%（100÷340）となり、おおむね3家庭に1家庭が何らかの相談をしていることになる。また、灘区内の保育所との連携プログラムである保育士プログラムは、登録者の約半数が利用している（以上、表10-A）。本施設における大きな特徴である共生社会に向けてのプログラムについては、「居場所づくり」の比率がもっとも高く、次に「ぼっとらっく」になっている（以上、10-B）。また、利用者であった女性がプログラムのリーダーとなるケースもあり、現在でも続いている「ベビーマッサージ」には、登録者のうち約45%が利用している（表10-C）。

表10-A 主に乳幼児と保護者を対象としたもの

番号	サービス・プログラム名	人数	比率(%)
1	毎日開設しているひろば「ふらっと」	340	78.7
2	「ふらっと」での相談	100	23.1
3	毎週火曜・午前の「おひさまひろばあーち」（保育士のプログラム）	209	48.4
4 *	産婦人科クリニックと「あーち」をつなぐ助産師のサービスや支援	31	7.2
5	おしゃべりほっとタイム	38	8.8

表10-B 障害者・児が中心のプログラム

番号	サービス・プログラム名	人数	比率(%)
1	居場所づくり	37	8.6
2 *	ほっと	11	2.5
3	パパママほっと	5	1.2
4	ぼっとらっく	16	3.7
5	ドーナッツ・ピーナッツ	7	1.6

表10-C 利用者がリーダーとなっているプログラム

番号	サービス・プログラム名	人数	比率(%)
1	ベビーマッサージ	191	44.2
2 *	スリング交流会	11	2.5
3 *	布おもちゃ交流会	5	1.2

表10-D 工作や習字のプログラム

番号	サービス・プログラム名	人数	比率(%)
1	めだか親子クラブ	20	4.6
2	おりがみあそび	26	6.0
3	筆をもとう	17	3.9
4 *	立体の紙工作	6	1.4

表10-E 音楽系のプログラム

番号	サービス・プログラム名	人数	比率(%)
1	ほのぼの音ランド	83	19.2
2	音楽の広場	51	11.8
3 *	人形あそび	15	3.5
4	親子わらべ歌あそび	58	13.4
5	みんなで歌おう	11	2.5

表10-F アート系のプログラム

番号	サービス・プログラム名	人数	比率(%)
1	らくがきお婆さんがやってきた	69	16.0
2	アートセラピー	32	7.4
3 *	叶うアート	6	1.4

表10-G ダンス系のプログラム

番号	サービス・プログラム名	人数	比率(%)
1	よさこいダンス	11	2.5
2	らくがきダンス	1	0.2
3 *	からだあそび	5	1.2

表10-H 鑑賞プログラム

番号	サービス・プログラム名	人数	比率(%)
1	紙芝居	75	17.4
2	人形劇	95	22.0
3	おはなしの国	40	9.3
4	あーち博物館	30	6.9

習字（書道）のプログラム「筆をもとう」は、大人向けのものとして定着しており、利用者は固定メンバーである。造形（工作）、音楽、アート、ダンスのいずれにおいても、過去にすでに提供されなくなったプログラムの被選択率は低い（以上、表10-D）。音楽系・アート系・ダンス系のプログラムのうち、被選択率が10%以上のいわゆる人気プログラムは、「ほのぼの音ランド」「音楽のひろば」「親子わらべ歌あそび」「らくがきおばさんがやってきた」であり、音楽系のプログラムの人気が高いことがうかがえる（表10-E～表10-G）。鑑賞プログラム（表10-H）は、自ら参加する必要がないため、比較的多くの登録者が利用している。特に、人形劇と紙芝居は人気が高い。

表10-I 保護者どうしの学習会

番号	サービス・プログラム名	人数	比率(%)
1 *	ひまわりの会	0	0.0
2 *	はこべらの会	1	0.2
3 *	ほっと学習会	9	2.1

表10-J 親講座（セミナーなど）プログラム

番号	サービス・プログラム名	人数	比率(%)
1	0歳児のパパママセミナー	33	7.6
2 *	1～2歳児のパパママ交流会	7	1.6
3 *	学齢期の子どもをもつ親講座（PECC-mini）	0	0.0
4 *	ノーバディーズパーフェクト	3	0.7
5 *	BP赤ちゃんが来た！	1	0.2
6	ビギナーズ交流会	66	15.3
7	家族で話そう！子育て	3	0.7
8	パパと遊ぼう！	10	2.3
9	上記以外のセミナー・講演会など	19	4.4

表10-K「あーち」運営にかかわるプログラム

番号	サービス・プログラム名	人数	比率(%)
1	「あーち通信」編集会議	9	2.1
2	あーち連絡協議会	4	0.9

保護者どうしが学び合うプログラム（表10-I）は、大学に場所を移したり、すでに休止していたりしており、ほとんど選択されていない。保護者を対象にした、いわゆるペアレンティングに関するセミナー（親講座）も、これまで様々に実施してきたが、現在まで続いている「0歳児のパパママセミナー」の受講者、2012年5月以降に実施し始めた「ビギナーズ交流会」一利用開始間もない利用者に互いに知り合う機会を提供する一の受講者が比較的多くなっている（表10-J）。なお、表10-Jで「その他」として記述されたものと、「Lその他」の記述の中で親講座プログラムに分類できるものは、ここで集約して整理しておく。「産科クリニックとの共催プログラム（年間3～4回 小児科医師のセミナーなどがある）」が10名、「灘区歯科医師会や兵庫県歯科衛生士会との連携プログラム（歯科相談など）」が7名、「あーち・コミュニティカレッジ（テーマは様々）」が3名であった。

本施設の運営にかかわるプログラムとして、毎月発行する通信

（月ごとのスケジュールも掲載）の編集に携わる利用者や隔月で開催される本施設の運営にかかわる会議に出席する利用者の数は少ない（表10-K）。

「Lその他」として、項目設定した選択肢以外に利用したサービス・プログラムとして自由記述を求めたが、その結果（親講座プログラムに分類できるものを除く）を整理すると、「消防署との連携プログラム・応急処置セミナー」が1名、「居場所づくりの合宿」が1名、「数多くの特別プログラムの列挙（サイエンスカフェ、気功、命をつなぐイベント、大掃除、バザーなど）」が1名、発達障害の子どものプログラムが1名、「みんなで楽しむコンサート」が1名などであった。

（7）施設利用による社会問題への興味・関心の高まり

8つの社会問題を提示し、本施設を利用することによって、これらの問題に対してどの程度興味・関心が高まったのかを、「とても興味を深めた」「やや興味を深めた」「あまり興味を深めていない」「まったく興味を深めていない」の4つの選択肢から選ぶように求めた。順に4点～1点を与えた。表11には、項目ごとの回答者数、平均値、標準偏差を示す。

表11 施設利用による社会問題への興味・関心

番号	期待する項目	人数	平均値	標準偏差
1	みんなが豊かに生活するために必要な平和	402	2.35	0.84
2	将来の世代の豊かな生活にかかわる環境問題	406	2.24	0.80
3	女性のいきいきとした就労・社会参加	401	2.32	0.83
4	障がい者・児がいきいきと生活するための支援	404	2.57	0.89
5	高齢者がいきいきと生活するための支援	402	2.09	0.78
6	親の子育て不安や児童虐待など子育てに関する問題	403	2.76	0.88
7	不登校やいじめなど青少年が直面する問題	400	2.22	0.79
8	女性が仕事と子育てを両立させるための支援と仕組みの必要性	403	2.53	0.93

4つの選択肢と得点分布は1点～4点であるので、中点は2.5点である。それを基準として、平均的に興味・関心を深めたとされる項目は、「親の育児不安・児童虐待」に関する問題、「障がい児・者に対する支援」にかかわる問題、「仕事と子育てを両立させる仕組み」にかかわる問題の3つであった。前者2つの結果は、「子育て支援を契機とした共生のまちづくりの拠点」を目指すという本施設の理念に即したものであり、この理念が実践に十分に反映されていることを示唆している。項目8に関しては、身近に迫った保育・教育施設の利用に関心を持つ利用者どうしの交流によるインフォーマルな情報交換に負うところが大きいのではないかと考えられる。

（8）利用者の現在の気持ち・考え・状況認識

最後に、6つの設問を挙げて、それぞれに対する回答者自身の気持ち・考え・状況認識を尋ねた。設問の内容は、共生に関するもの、他者への共感性に関すること、援助を求める志向性、孤立感、経済状況（家計）、育児ストレスである。「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまら

ない」の4つの選択肢から選ぶように求めた。順に4点～1点を与えた。表12には、項目ごとの回答者数、平均値、標準偏差を示す。

表12 現在の気持ち・考え・状況認識

番号	期待する項目	人数	平均値	標準偏差
1	わが子が障害のある子どもと一緒に遊ぶことには抵抗がある	416	1.84	0.70
2	他人の悩みを聞いたりするのは嫌だ	417	1.66	0.61
3	育児についてストレスや問題を感じたらアドバイスや支援を求めると思う	415	3.12	0.74
4	日々の生活が孤独だと感じることがある	417	2.00	0.79
5	家計がとても苦しいと感じることがある	417	1.98	0.83
6	子どもをもつ前よりもストレスを感じている	399	2.26	0.89

【注】項目6については、子育て中に本施設を利用した人のみ回答するように指示した。

1点～4点という分布の中点である2.5点よりも平均値が高ければ、多くの回答者が、その項目内容を肯定していることを、それよりも平均値が低ければ、多くの回答者が、その項目内容を否定していることを表している。項目3は、平均値が3点以上で中点を大きく超えており、本施設の利用者の多くは、育児にかかわってストレスや課題を感じたら援助を求める傾向が強いことが明らかにされたと言える。実際に、本施設は子育て支援施設という側面を持っているため、こうした被援助志向性の高い保護者が利用しているということになる。ただ、本施設を利用したことで、その効果などを実感したために、被援助志向性が高まったという可能性もありうる。反対に、残りの5項目の平均値は中点を下回っているが、特に、項目1、項目2、項目5は2点未満である。こうした結果から、全体的に、本施設の利用者の多くは、他者の悩みに共感的であり、障害のある子どもに対する抵抗感が少ないことに加え、家計には余裕のあるといった特徴があると考えられる。

(9) プログラム利用と他の変数との関連性

本施設では、利用者の多様なニーズに応えられるよう、様々なサービスやプログラム（以下プログラムと一括する）を編成している。ここでは、プログラムの多様性を積極的に活用した利用者と同じようなプログラムを限定的に活用した利用者の「利用後の満足度」「興味・関心の高まり」「現在の気持ち・考え・状況認識」を分析した。すなわち、表10-A～表10-Kに示されているプログラムを何種類利用しているかによって、利用多様群と利用限定群とに分け（利用頻度ではないことに留意）、上記3変数における各項目の平均得点をこれら2群間で比較（独立したサンプルのt検定）した。

まず、回答者が利用したプログラムの種類は、1～27までの範囲に分布しており、3種類以下の利用者（209名・50.4%）を利用限定群とし、4種類以上の利用者（206名・49.6%）を利用多様群とした。以下、「利用後の満足度」「社会問題への興味・関心の高まり」「現在の気持ち・考え・状況認識」の順に、この両群のt検定結果を表示する、

表13 プログラム利用の多様性と利用後の満足度

番号	期待する項目	df	t 値	有意確率
1 a	多様な境遇・年齢の人と知り合えた	404	-5.77	.000
1 b	多様な境遇・年齢の人との相互理解が深まった	403	-4.65	.000
2	自分のことで精いっぱいだったが、視野を広げられた	400	-4.45	.000
3	他者や社会に役立つこと（十分な社会的活動）ができた	399	-2.43	.016
4	相談を通して、不安が和らいたり悩みが解決したりした	402	-5.75	.000
5	音楽・アートなど創造的・文化的活動が楽しめた	402	-6.11	.000
6	自分の暮らしが豊かになった	402	-6.04	.000
7	今後のキャリアの重ね方についてのヒントが得られた	401	-2.16	.031
8	家事・育児や仕事からでは学べないことを学べた	401	-4.67	.000
9 a	大学の情報や取組を知識として得て自信がついた	400	-2.12	.034
9 b	学ぶことの楽しさを知り、いつかまた学校等で学びたい	402	-3.79	.000
10 a	「あーち」以外の方でも交流できる人と知り合えた	399	-6.53	.000
10 b	価値観の合う人と知り合えた	402	-7.08	.000
11	家族内や親族間の関係のあり方が良くなった	401	-3.19	.002
12	友だちや支援者とのネットワークが充実した	401	-4.60	.000
13	子ども連れで楽しく遊ぶことができた	407	-2.69	.008
14	子ども連れでゆっくりと時間を過ごせた	407	-3.00	.003
15 a	育児に関する同じ関心をもつ仲間と知り合えた	406	-6.20	.000
15 b	人によってそれぞれ育児の悩みがあることが分かった	407	-6.30	.000
16	子育てに関する情報・ヒントなどを得ることができた	407	-5.54	.000
17	子育てに関する具体的なアドバイスを得られた	407	-7.20	.000
18	子どもの行動面・知的な面・対人面が促された	407	-5.10	.000
19	子どもの暮らしがより豊かになった	407	-5.52	.000
20	子どもに仲の良い友だちができた	405	-6.96	.000
21	お互いに高め合える育児仲間をもつことができた	406	-6.39	.000
22	自分の子育てに見通しや自信をもてるようになった	407	-5.80	.000

表13は、利用後の満足度・26項目を従属変数とした結果である。なお、t値にマイナスがついている項目は、利用多様群のほうの平均が高いことを意味する。この表から、すべての項目において、利用多様群のほうが利用限定群よりも満足度が高くなっていること、さらに、その差がすべての項目で統計的に有意であることが示されている。ここから、様々なプログラムに参加するほうが、固定したプログラムだけに参加するよりも、多様な側面における満足度が高くなることが明らかとなった。

次に、利用による社会問題への興味・関心の高まり・8項目を従属変数としたt検定結果を表14に示す。ここでも、利用多様群のほうが利用限定群よりも、社会的な問題に対して関心を高めて

表14 プログラム利用の多様性と社会問題への興味・関心

番号	期待する項目	df	t 値	有意確率
1	みんなが豊かに生活できるために必要な平和	391	-3.86	.000
2	将来の世代の豊かな生活にかかわる環境問題	388	-2.90	.004
3	女性のいきいきとした就労・社会参加	387	-3.14	.002
4	障がい者・児がいきいきと生活するための支援	391	-5.17	.000
5	高齢者がいきいきと生活するための支援	389	-3.38	.001
6	親の子育て不安や児童虐待など子育てに関する問題	390	-4.69	.000
7	不登校やいじめなど青少年が直面する問題	397	-2.60	.010
8	女性が仕事と子育てを両立させるための支援と仕組みの必要性	390	-3.82	.000

表15 プログラム利用の多様性と現在の気持ち・考え・状況認識

番号	期待する項目	df	t 値	有意確率
1	わが子が障害のある子どもと一緒に遊ぶことには抵抗がある	401	0.10	.921
2	他人の悩みを聞いたりするのは嫌だ	402	2.62	.009
3	育児についてストレスや問題を感じたらアドバイスや支援を求めらると思う	400	-2.69	.008
4	日々の生活が孤独だと感じることもある	402	-1.27	.207
5	家計がとても苦しいと感じることがある	402	-2.24	.026
6	子どもをもつ前よりもストレスを感じている	385	-0.16	.877

【注】項目6については、子育て中に本施設を利用した人のみが回答した。

いることが明らかにされている。

表15は、現在の気持ち・考え・状況認識・6項目を従属変数としたt検定結果である。まず、項目1、項目4、項目6には有意差は見られてはいない。残りの3項目に関する結果から、利用多様群のほうが利用限定群に比べて、他者の悩みを聞くことへの抵抗感は少なく、被援助志向性も高い一方で、家計が苦しいと感じる程度も高いことが示されている。様々なプログラムを通して、他者との交流の中で悩みを話し合う・聞きあうという関係性が構築された可能性、援助を積極的に受けることの良さを知った可能性が推測されるとともに、本施設のプログラム利用が無料であることと家計の問題とが関連する可能性（習いごとの代替として、本施設の様々なプログラム参加する）も示唆されている。

(10) 就労状況と他の変数との関連性

施設を利用し始めた時の就労状況の違いによって、施設利用時の期待度と利用後の満足度が異なるかどうかを分析した。すでに表4で示した利用開始時の就労状況結果で、統計的分析に耐える十分な人数があるのは、フルタイム・育児休業中の126名（F・Off群）と専業主婦（夫）247名（S群）である。そこで、上記2変数における各項目の平均得点を、これら2群間で比較（独立したサンプルのt検定）した。

表16は、利用開始時の期待度・22項目を従属変数とした結果であり、t値にマイナスがついている場合は、専業主婦（夫）の平均値のほうが高いことを示す。有意差（5%水準）の見られたのは「自分の子育てをより充実させたい（項目22）」のみであり、t値の符号がプラスであることから、この期待はフルタイム・育休中群のほうが明らかに高くなっている。明確な有意差ではないものの、差のある傾向（10%水準）に相当する項目に着目すると、「音楽・アートなど創造的・文化的活動を楽しみたい（項目5）」は専業主婦（夫）群が高く、「地域でのつながりを豊かにしたい（項目12）」と「子育てに関する情報・ヒントを得たい（項目16）」については、フルタイム・育休中群のほうが高くなっている。フルタイムで勤務していた女性のほうが、専業主婦に比べて、地域とのつながりや情報取得を通して自らの育児を充実させたいと思う傾向が強いことが分かる。

表17は、利用後の満足度・26項目を従属変数とした結果である。なお、t値にマイナスがついている項目は、専業主婦（夫）の平

表16 利用開始時の就業状況と期待度

番号	期待する項目	df	t 値	有意確率
1	多様な境遇・年齢の人と知り合いたい	362	-0.04	0.97
2	自分の狭い視野をもっと広げたい	365	-0.42	0.68
3	他者や社会の役に立ちたい（社会参加したい）	366	-0.99	0.32
4	不安や悩みの相談にのってもらいたい	366	1.45	0.15
5	音楽・アートなど創造的・文化的活動がしたい	367	-1.93	0.06
6	自分の暮らしを豊かなものにしたい	365	-0.33	0.74
7	自分の今後のキャリアについて考えてみたい	367	-0.71	0.48
8	家事・育児や仕事以外のことを学びたい	367	0.18	0.97
9	大学の情報や取組に触れられると思った	367	-0.10	0.92
10	プライベートなことを話せる友だちがほしい	366	-0.15	0.88
11	家庭から離れてリフレッシュしたい	367	-0.23	0.82
12	地域でのつながりを豊かにしたい	366	1.86	0.06
13	子ども連れで楽しく遊びたい	370	1.30	0.19
14	子ども連れでゆっくりと時間を過ごしたい	369	0.41	0.68
15	育児について同じ関心をもつ仲間と知り合いたい	367	0.78	0.44
16	子育てに関する情報・ヒントなどを得たい	369	1.84	0.07
17	子育てに関する具体的なアドバイスを得たい	367	0.53	0.59
18	子どもの行動面・知的な面・対人面に良いと思った	369	0.32	0.75
19	子どもの暮らしをより良いものにしたい	368	0.39	0.70
20	子どもの友だちを見つけてやりたい	368	1.27	0.21
21	自分の育児仲間をもちたい	368	0.32	0.91
22	自分の子育てをより充実させたい	368	2.12	0.04

表17 利用開始時の就業状況と利用後の満足度

番号	期待する項目	df	t 値	有意確率
1 a	多様な境遇・年齢の人と知り合えた	366	-1.51	.132
1 b	多様な境遇・年齢の人との相互理解が深まった	365	-0.55	.581
2	自分のことで精いっぱいだったが、視野を広げられた	362	-2.07	.039
3	他者や社会に役立つこと(十分な社会的活動)ができた	363	-0.73	.465
4	相談を通して、不安が和らいだり悩みが解決したりした	365	1.78	.073
5	音楽・アートなど創造的・文化的活動が楽しめた	365	-3.35	.001
6	自分の暮らしが豊かになった	365	0.04	.967
7	今後のキャリアの重ね方についてのヒントが得られた	365	-0.77	.444
8	家事・育児や仕事からでは学べないことを学べた	364	-1.01	.313
9 a	大学の情報や取組を知識として得て自信がついた	364	-0.89	.373
9 b	学ぶことの楽しさを知り、いつかまた学校等で学びたい	365	-1.35	.178
10 a	「あーち」以外の場でも交流できる人と知り合えた	363	1.27	.204
10 b	価値観の合う人と知り合えた	365	0.67	.505
11	家族内や親族間の関係のあり方が良くなった	364	-0.79	.428
12	友だちや支援者とのネットワークが充実した	365	0.59	.558
13	子ども連れで楽しく遊ぶことができた	369	1.64	.102
14	子ども連れでゆっくりと時間を過ごせた	369	1.26	.209
15 a	育児に関する同じ関心をもつ仲間と知り合えた	369	1.18	.239
15 b	人によってそれぞれ育児の悩みがあることが分かった	369	0.49	.623
16	子育てに関する情報・ヒントなどを得ることができた	369	1.17	.243
17	子育てに関する具体的なアドバイスを得られた	369	-0.08	.933
18	子どもの行動面・知的な面・対人面が促された	369	-0.53	.596
19	子どもの暮らしがより豊かになった	369	-0.64	.521
20	子どもに仲の良い友だちができた	367	-0.31	.758
21	お互いに高め合える育児仲間をもつことができた	368	0.56	.574
22	自分の子育てに見通しや自信をもてるようになった	369	0.65	.513

均値のほうが高いことを示す。

有意差の見られた項目は2つであり、「自分のことで精いっぱいだったが、視野が広げられた（項目2／5％水準）」と「音楽・アートなど創造的・文化的活動を楽しめた（項目5／1％水準）」であった。いずれも、t値の符号がマイナスであるので、専業主婦（夫）群のほうがフルタイム・育休中群よりも、これらについては満足度が高かったということになる。

（11）子どもの発達と利用者の居住地との関係

表9のところで、子どもの発達と本施設の利用との関係を分析しているが、子どもの発達が順調である家庭と子どもの発達に課題を感じている・課題がある家庭との2群に分けて、その居住地

（本施設のある灘区とそれ以外の2群）とのクロス分析をおこなった（表18参照）。発達順調群は表9における選択肢「1」を選んだ回答者、発達課題群は表9における選択肢「2」「3」「4」のいずれかを選んだ回答者とした。居住地の2群は、表2における「灘区」選択者と「灘区以外」の選択者とした。

表18 子どもの発達と居住地とのクロス分析結果

	順調群	課題群	計
灘区居住者	306	25	331
灘区以外居住者	45	18	63
計	351	43	394

この2×2のクロス表について、カイ自乗検定をおこなったところ、 $\chi^2=21.94$ (df=1, p<.01) となり、分布の偏りが有意であることが明らかとなった。残差分析によると、1％水準で、順調群は灘区内の居住者が多く、課題群は灘区以外の居住者が多いと結論づけられる。すなわち、子どもの発達に課題を感じている・課題のある家庭は、灘区以外から本施設を利用しているケースが多く、子どもの発達に課題を感じていない家庭の利用は灘区内のほうが多いことが明らかにされた。近隣の施設を利用することに抵抗のある家庭が、居住地からは少し距離のある本施設を活用している可能性がある。

4. 全体的討論

（1）「共に生きるまちづくり」の観点から

「あーち」による「共に生きるまちづくり」への貢献は、次のような要素をもつ展開としてイメージされてきている。①「あーち」に子育て支援をキーワードにしながら多様な人たちが集まること。②集まってきた人たちの間にさまざまな関係が形成されること。③その関係の中で特に関係のネットワークから排除されがちな人たちに対する意識が高まること。④形成された関係が「あーち」外での関係として持続すること。⑤地域の中での関係が活性化されることによって地域全体のもつ社会関係資本が強化されること。

これらの要素のうち本論で検討できたのは、①及び②の部分であり、これらの促進に「あーち」のどのような機能が効果を発揮しているか、ということである。その視点から読み取ることができることについて検討する。

第一に、「あーち」利用者の多様性については、男性の回答者が非常に少なく（約1.2％）、回答者の年齢幅が大きく（21歳～78歳）、発達の問題に関わって利用するようになった利用者が約10％であったという点が、今回のデータから読み取れることである。回答者の大部分が、乳幼児の子育て中に「あーち」を利用した母親である。その中で、数的にマイノリティの人たちが利用しやすい施設であったかどうか、という点で検討する必要がある。今回はそういった人たちに焦点を当てるのが難しい調査であった。男性利用者の多くは子どもの父親であるが、家族ごとに調査票を配布しているために夫婦ともに利用した経験がある場合でも、母親が回答するケースが多かったことが推測される。また、外国籍の利用者や外国語を母語とする利用者については、調査票が多言語に対応していないこと、そのような利用者は転居等の移動が多いことなどの理由から、回答者数を確保できていない。実感としては、

日本語の使用に困難のある外国人の利用は少なからずあるが、データには反映されていない。聞き取り等を通して、そういった利用者の実態にも焦点化していく必要がある。

第二に、利用者間でどのような関係形成がなされていたのかということについては次のような点がデータから指摘できる。「あーち」利用の満足度について、「多様な境遇・年齢の人と知り合えた」「多様な境遇・年齢の人との相互理解が深まった」「『あーち』以外の場でも交流できる人と知り合えた」とする回答の平均値がそれぞれ2.72、2.41、2.51であり、それほど高い値とは言えない（満足度が最も高いと4、最も低いと1、中央値が2.5）。「あーち」において、そうした「多様な境遇・年齢の人と知り合いたい」とする期待値も2.53と、そもそも高くはない。ただし、これらのデータを、どのくらい多様な「あーち」のプログラムに参加しているかというデータとクロスさせると、いずれも高い数値で相関が示された（表13参照）。利用者は、「あーち」のさまざまなしかけに関わるうちに、多様な人たちと出会い、関係形成がなされていくのだと理解することができる。

第三に、利用者が、「あーち」を利用することによって、関係のネットワークから排除されがちな人たちに対する意識が高まるかどうかについては、有意な結果を得ることができなかった。具体的には、多様なプログラムに参加していることと、「わが子が障害のある子どもと一緒に遊ぶことには抵抗がある」かどうか問うた設問への回答との間には相関がみられなかった。これは、そもそも「わが子が障害のある子どもと一緒に遊ぶこと」に対する抵抗感をもっている回答者がほとんどいなかったことと関連がありそうである。他方、「あーち」を利用したことによって「障がい者・児がいきいきと生活するための支援」「高齢者がいきいきと生活するための支援」について興味・関心が高まったとする回答の平均値は、それぞれ2.57、2.09であった。これらの数値も、興味・関心が高まったとするには十分ではない。ただし、これらのデータを、どのくらい多様な「あーち」のプログラムに参加しているかというデータとクロスさせると、いずれも高い数値で相関が示された。利用者は、「あーち」のさまざまなしかけに関わるうちに、支援の必要な人たちに対する理解が促進されるようになったと言うことはできそうである。

これらの検討から、次のような結論が得られよう。「あーち」の利用者全体を対象としたときには、「あーち」が「共に生きるまちづくり」に貢献しているということを積極的に説明するデータを得ることはできなかった。しかし、「あーち」利用者の多様性はある程度は確保されており、「あーち」のさまざまなプログラムに参加している人たちは、多様な人たちと出会い、関係形成し、また関係のネットワークから排除されがちな人たちへの意識が高まったということができる。

また、「あーち」が「共に生きるまちづくり」に貢献しているかどうかという観点からは、そもそもマイノリティの人たちに特化したデータも必要であり、利用者全体の量的データだけでは十分検討しきれない。特化したデータ処理、自由回答記述やインタビュー調査などの質的データもあわせた分析は別稿で改めて検討したい。

（２）育児支援（親支援）の観点から

本施設は、地域住民が「共に生きるまちづくり」実現に貢献していくための重要な過程・道筋として、育児支援すなわち育児家庭のエンパワメントを大きな柱と位置づけてきた。したがって、利用者が本施設利用を通して自分自身をエンパワメントできたかどうか主たる関心となる。以下、これを軸としながらも、関連する他の視点も含めながら議論をすすめていく。

まずは、エンパワメントとは関連しないが、回答者の属性にふれる。内閣府（2014：14頁）に記載されている「平均初婚年齢と母親の平均出生時年齢の年次推移」の2012年におけるデータを見ると、初婚の平均年齢は29.2歳、第1子出産時の平均年齢は30.3歳・第3子出産時の平均年齢は33.3歳となっている。こうした平均値からすると、本施設の利用者の平均年齢（38.7歳）は若干高い傾向にある。もちろん、祖父母世代の回答者が平均値を引き上げている影響もあるが、40歳代の母親だけで約35%を占めていることから考えると、本施設の利用者の結婚・出産の年齢は全国に比べて高いと判断される。この結果が、本施設が都市部（政令指定都市）にあり、利用者のうちかなり多くがフルタイムで働く母親（育休中と就業中を合わせて回答者全体の約30%）であることの反映である可能性は、断定できないものの、高いと推測される。

エンパワメントを考えるときに、本施設の大きな特徴である相談援助（主に育児に関する相談をいつでも気軽にもちかけることができるよう、日替わりで専門性を異にする相談員を配置している）が十分に機能しているかどうか、さらに、相談員との対話や利用者同士の交流を通して育児に関する情報・ヒント・アドバイスが得られたかどうか、重要な評価指標となりえる。そこで、表7と表8のうち、項目4、項目16、項目17における期待度と満足度に着目する。「育児にかかわる不安や悩みへの相談」については、不安や悩みがある利用者のみが期待するので、利用当初の期待は中点に近く、利用後の満足度は若干高くなっている。ここから、相談援助に関しては一定の成果を上げていると判断できる。一方、「育児に関する情報・ヒントを得る」「育児に関する具体的なアドバイスを得る」については、当初の期待は高いものの満足度はいずれも若干下降している。しかし、いずれも「あてはまる」水準である3点を維持しているため、多くの利用者の満足度が低くなったとは言えず、一定の効果があつたと評価できる。こうしたエンパワメントにかかわる指標の変化は、本施設の利用頻度と関係している可能性が高いと想定されるが、今回は利用頻度については分析できていないため、今後の詳細な分析によって明らかにしていきたい。

利用開始時、利用者は、子どもの生活を充実させたり子どもの発達を促進させたいという期待（目的）、仲間づくりや助言を得たりして自分の育児をより充実させたいという期待（目的）を強くもっているのに対し、自分自身が「家事・育児や仕事以外のことを学ぶ」「他者や社会の役に立つ（社会参加する）」「自分のキャリアについて考える」などの、いわゆる地域貢献や生涯学習の場として、本施設を利用したいとする利用者は少なかった。これに対し、一定期間を利用した後の満足度については、当初の期待が高かった上記項目得点のほとんどが低下していたものの、数値自体は4点満点中3点を超えていた（「子どもの友だちを見つける」の

み3点を下回った)。つまり、当初の期待が高かった分、天井効果の影響もあり、当所の期待以上の満足度は得られなかったものの、一定水準の満足度を多くの利用者は感じていると判断して良いであろう。一方、当初の期待が低かった家事・育児以外の側面における満足度は上昇していたものの、その得点は中点を上回ってはいない。いずれにしても、こうした地域貢献への志向性の高まりや生涯学習としての施設利用も、重要なエンパワメントにかかわる指標である。

ここまでで検討してきたエンパワメントにかかわって、興味深い結果が、本稿の「利用の多様性」を取り上げた分析によって得られている。すなわち、少数の決められたプログラムだけに参加する利用者（利用限定群）と、数多くのプログラムに多様に参加する利用者（利用多様群）とを比較すると、満足度については、26項目すべてにおいて、利用多様群のほうが利用限定群よりも統計的に有意に高くなっていること（表13）、社会問題への興味・関心についても、8項目中7項目において、利用多様群のほうが利用限定群よりも統計的に有意に高くなっていること（表14）が明らかにされている。こうした結果からは、少なくとも多種多様なプログラムに参加すること（「利用頻度」については別の機会に委ねたい）は、現段階では因果関係は明確化できないものの（そもそも社会問題への興味・関心が高い者が積極的にプログラムを活用し、その結果として満足度を高めている可能性もある）、利用者が自らをエンパワメントする機会を高めるという可能性・仮説を提示してくれている。言い換えれば、利用者のニーズを踏まえて多種多様なプログラム編成を整えることは、拠点にとって重要な運営指針であると言える。

さらに、この利用の多様性に関する分析は、上記とは別の興味深い論点も提供してくれている。それは、利用者の「現在の気持ち・考え・状況認識」における上記両群間の差異（表15）から導かれる。利用多様群は利用限定群に比べて、有意に他者に共感的であり・被援助志向性が高く・家計が苦しく感じる傾向にある。ここから推測されることは、多種多様なプログラムの利用と利用者の他者への関心・信頼（共感の気持ちや援助を率直に求める傾向）との関連性、および、多種多様なプログラムの利用と本施設によるプログラムの無料実施との関連性である。ここでも因果関係は明確化できないものの、経済的負担のない多様なプログラムへの参加促進が、利用者どうしの相互支援・交流や連帯感を高め、それがさらに地域づくり（共生のまちづくり）への関心につながる可能性を持ちうることを示唆されていると考えられる。

（3）キャリア形成支援（親支援）の観点から

本施設が開設された2005年9月から今回調査が実施された2015年8月末までの10年間は、女性のキャリア形成支援という観点からすると、様々な施策が決定され実行された時期と重なっている。例えば、2007年には、内閣府が「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」と「仕事と生活の調和推進のための行動指針」を策定している。この憲章と行動指針は、2010年には、政・労・使の合意のもと、「仕事と生活の調和推進官民トップ会議」において改訂されている。これに加え、「次世代育成支援対策推進法（2005年）」「改正育児・介護休業法（2009年）」などの施行によって、働くことを選択した母親が、子育てをしながら自らのキャリ

ア形成を進めるための支援が具体的に展開されてきた。

このようなワークライフバランス施策が重視された時期において、育児休業中の母親が、本施設のような地域資源を利用することは、ライフ・キャリア（広義の意味で使われる。生涯にわたるキャリアのこと；川喜多 2014）という観点からは、どのような意義をもつのであろうか。Super（1980）によるライフ・キャリア・レインボー理論を援用すると、「職業人」としての母親が育児休業期間を経て職場復帰を果たす（キャリアを継続する）までの移行期には、「市民」としての役割や活動が増えるという。本施設は、地域子育て支援拠点（ひろば型）であり、育児休業中の母親にとっては、「職業人」として所属する企業等の組織以外の居場所とならう。子育ての現場となる地域で、「市民」として他の住民と関わることのできる「あーち」のような施設で、仕事から離れてどのようなことに興味・関心を持ち、それを充足していくか、その過程を明らかにすることは、子育て支援を通じたキャリア形成支援の課題を探ることでもある。

2016年4月より施行される「女性活躍推進法」により、今後ますます、女性が子育ての主体であると同時に労働の主体として、どのように各自のライフ・キャリアを構築していくのかが問われていくことになる。こうした流れの中で、本施設を利用する母親の属性や状況もさらに変化していくと予測される。この意味で、本施設の設立当初に漠然と想定していた「専業主婦が本施設を含む地域子育て支援拠点等の利用者のマジョリティである」というこれまでの前提を見直す必要がある。以下に、本調査のデータから、職業を持つ母親による「あーち」利用実態を捉え直し、職場以外の居場所としての本施設の意義を検討する。

まず、利用者全体のうち利用開始時、育児休業中の人を含むフルタイム就業者数は、表3に示すとおり、126名（29.4%）であった。前回の調査では、質問方法（選択肢）が異なるため、得たデータ（前回調査① 利用者実態調査 Table4 参照）と単純に比較することは難しいものの、フルタイムおよび育児休業者と回答を得た人の割合（15.6%）から、ほぼ2倍に増加している。次世代育成支援対策推進法に基づき、従業員の仕事と子育ての両立を図るための雇用環境の整備が図られた結果、「くるみんマーク」認定を受けた企業は、979社（2010年9月末）から2,326社（2015年9月末）へと2.37倍増加している。就労しながら育児休業を取得するという子育て環境が整備されたことに伴って、今回調査の結果（フルタイム就労者の増加率）がこの認定企業の増加率に接近している点は興味深い。また、近年に実施された全国規模の「地域子育て支援拠点事業に関するアンケート調査2015」（NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 2016）によると、常勤・非常勤の別は不明であるが、育児休業中の母親が20.0%となっており、本施設の利用者のほうが就業したまま出産・育児をしている母親の割合が明らかに高い。この結果は、本施設が、政令指定都市の都心部に位置していることから、郊外や農村部に比べて企業・団体・行政機関等へ就労する女性が多く居住しており、制度の恩恵をいち早く受けている母親が多く存在することを示唆している。今後、就労および子育て支援策の整備が進むにつれて、働く母親の「あーち」利用は拡大していくと予測される。

次に、本施設が働く母親にとってどのような場所であったのか、

そこで過ごすことの意味を、施設利用開始時の期待度と利用後の満足度に関する結果から考察する。表16・表17において、フルタイム・育休中群の方が専業主婦群よりも平均値が高かった項目のうち、「子ども連れで楽しく遊ぶ」と「子ども連れでゆっくりと時間を過ごす」を取り上げる。利用者全体でみると（表7・表8）、「子ども連れで楽しく遊ぶ」は3.77点→3.69点、「子ども連れでゆっくりと時間を過ごす」は3.62点→3.58点と満足度が期待よりも低くなっている点からすると、専業主婦群に比べて、フルタイム・育休中群が、「あーち」で子どもと一緒に過ごした時間をより有意義な時間として高く評価していることがうかがえる。この結果からは、ライフ・キャリアのなかで、職場復帰を果たすまでの期間、すなわち育児休業中に、自分の居場所として本施設を利用し、その存在を客観的に捉え、今後の子育てを通じて「市民」として愛着をもって地域にかかわっていく契機を得ているであろうと推測できるが、明確な結果が得られたとは言えない。また、今回調査の量的分析からは明らかにできていない「働きながら子育てをする母親」の利用ニーズや利用による変化等は、今後、自由記述の分析や追加で実施するインタビュー調査といった質的な考察によって別稿で明らかにしていきたい。

また、今回の調査では、本施設の利用を通して、女性が自己のキャリアについての意識や子育て以外の学びへの興味関心が高めることができたかどうかを見出そうと試みたが、利用者全体のデータからは特筆すべき結果は得られなかった。しかしながら、子どもの成長とともに地域と関わる機会は増え、納税者として仕事を持つ母親にとって、地域で共に生きる人たちのとの関係構築は不可欠であるのと同時に、キャリア形成・キャリア継続を支援することが社会関係資本の強化にもつながるのではないかということにも今後注目していきたい。

5. おわりに

本論では、「あーち」設立10周年の利用者アンケート調査の単純集計に基づいて、「あーち」の10年間の実践を全体的に評価することを目的とした。「あーち」は、「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」というコンセプトを掲げて実践を行っている。このコンセプトは、社会にあるさまざまなニーズを拾い上げ、多様な背景をもつ人々を相互に結びつけようとする意図を反映している。したがって、「あーち」を評価する指標も、子育て中の保護者の期待と満足度、子どもや保護者を中心にした人間関係の広がり、人間関係の広がりをもたらす地域社会へのインパクトといった観点など多様に広がる。

考察の結果、「あーち」の実践の効果として評価しえた点を要約して述べるとすれば、「あーち」への期待、「あーち」利用の満足度がともに高く、多様な仕方で「あーち」を利用している人々ほど、さまざまな人々とのコミュニケーションを活発に行い、さまざまな学びを得ていることが明らかになった。この調査結果は、「あーち」が利用者にサービスを提供するという機能よりも、多様な人々や社会資源を相互に結びつける機能に力点を置いてきた成果が表れていると理解できよう。利用者どうしを結びつける仕掛け、相談員やメンター、外部の社会資源などに気軽にアクセ

スできる機会の提供、利用者が「あーち」の運営に貢献できる機会の提供などといった、「あーち」の運営として気を配ってきたポイントが、利用者の「あーち」の活用と社会関係や関心の拡大との相乗効果を生み出していることが確認された。しかし他方で、「あーち」からのサービス提供を期待している利用者には、十分な満足が得られないし、社会関係や学びの広がりもみられないということも確認された。

こうした今回の調査結果に基づいて、さらに考察を深めていくことが期待されるテーマも浮かび上がってきた。「あーち」での人間関係の広がり、地域づくりなどといったより広い文脈の社会関係にどのような影響を与えているのか、あるいは与え得るのか。利用者の多くを占める育児中の母親のキャリアにとって、「あーち」はどのような役割を果たしているのか、あるいは果たしえるのか。「あーち」の利用によって利用者はどのような認識変容を経験しているのか、あるいは経験しえるのか。これらの問いは、さらにデータを分析していくことによって深められる。幸い、アンケート調査の自由記述欄の記述量が豊富であり、また利用者、ボランティア、スタッフそれぞれに対して複数のインタビュー調査も実施しているところであり、検討の材料になるデータは豊富にある。本論では、そうした検討に先駆けて、「あーち」の実践の成果と課題の輪郭を描くことができたのではないかと思う。

謝 辞

本研究の遂行にあたっては、多くの人たちのご尽力なしには成り立たなかったが、特に、現在のスタッフとして「のびやかスペース あーち」の日常的な取組・活動を支えてくれている山名睦子さん・永野郁子さん・朝野規巳子さん・小林真理子さんに深謝申し上げると共に、本調査にご協力いただいた本施設の利用者のみなさまにも心より感謝申し上げる。

引用・参考文献

- 川喜多喬（2014）キャリア 日本キャリアデザイン学会監修 ナカニシヤ出版 3ページ
- 厚生労働省 HP 次世代育成支援対策取組状況
<http://www.mhlw.go.jp/general/seido/koyou/jisedai/sekoujyoukyou.html>（最終アクセス2015.3.15）
- 内閣府（2009～2015）仕事と生活の調和レポート
<http://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/report.html>（最終アクセス2015.3.15）
- 内閣府（2011）男女共同参画白書平成23年版 第2部第6章
- 内閣府（2014）平成26年版 少子化社会対策白書 日経印刷株式会社
- NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会（2016）概要版 地域子育て支援拠点を利用する母親1,175人に聞きました！「地域子育て支援拠点事業に関するアンケート調査2015」
- Super, D. E. (1990) A Life-Span, Life-Space Approach to Career Development. In D. Brown & L. Brooks, *Career Choice and Development; Applying contemporary theories to practice (2nd ed.)*. SF; Jossey-Bass.
- 寺村ゆかの（2012）神戸大学サテライトで提供される地域子育て

- 拠点事業の評価研究－利用者を対象とした悉皆調査を通して
－ 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 5 (2)
119-131
- 津田英二・伊藤篤・寺村ゆかの・井手良徳 (2012) 「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」実践の意義と課題－「のびやかスペースあーち」利用実態調査単純集計からの考察－ 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 5 (2)173-185
- 参考文献 (「のびやかスペース あーち」に関する資料)**
- 伊藤篤 (2008) 「いのちを実感し親になることを考える体験学習」プロジェクト (Ⅰ～Ⅲ) 事業評価報告書 2007年度神戸市委託事業報告書 (Web 公開 全143頁)
- 伊藤篤 (2009) 子育て支援「つどいの広場」における相談のあり方に関する一考察－大学サテライト施設における相談件数・相談内容の分析を通して－ 心の危機と臨床の知 (甲南大学人間科学研究所編) 10 5-13
- 伊藤篤・寺村ゆかの (2010) 2009年度 高校生の赤ちゃんふれあい体験学習の実践内容とその効果 <部門報告書 No.3> 神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター子ども家庭支援部門 (Web 公開 全31頁)
- 伊藤篤 (2012) 大学サテライト施設における切れ目のない子育て支援 子育て研究 (日本子育て学会編) 2 22-27
- 伊藤篤・川谷和子 (2014) 地域子育て支援拠点・ひろば型における早期ペアレンティング講座の意義－0歳児のパパママセミナー受講者の自由記述を手がかりにして－ 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 7 (2) 125-131
- 伊藤篤・塚本美由紀 (2015) 子育てひろばにおける青少年の養護性育成を目指した体験学習の意義－「0歳児ふれあい体験」と「赤ちゃん人形プログラム」の比較－ 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 9 (1) 57-71
- 神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター (2009) インクルーシブな社会を目指す実践 (Web 公開 全109頁)
- 神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター (2011) インクルーシブな地域社会創成のための都市型中間施設
- 劉小賀・榊原久直・中村美智子・江角彩・高橋真琴・盛敏・清水伸子・津田英二 (2011) インクルーシブな社会を目指す実践における葛藤の積極的な意味－自閉症児のストレス表出に対する他者の反応をめぐる考察－ 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 4 (2) 39-48
- 清水伸子・高橋真琴・津田英二 (2014b) インクルーシブな社会をめざす実践におけるインフォーマルラーニングの重層性 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 8 (1) pp.165-179
- 清水伸子・津田英二 (2007) インフォーマルな形態での福祉教育実践におけるデータに基づく評価枠組み形成モデル 日本福祉教育・ボランティア学習学会年報 12 94-115
- 高橋真琴 (2010) 発達障がいのある子どもたちへのインフォーマルな「居場所づくり」の取り組みについて LD研究 19 (2) 157-166
- 寺見陽子・南憲治・松島京・及川裕子・寺村ゆかの・伊藤篤 (2016) 父親の養育性・役割取得を促す教育プログラムの視点に関する考察 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 9 (2) 1-22
- 寺村ゆかの・伊藤篤 (2008) 妊娠期から出産後までの女性のエンパワメントを目指した実践的研究－相談・家庭訪問・地域資源を利用したアウトリーチの試みを通して－ 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 2 (1) 115-123
- 寺村ゆかの・伊藤篤 (2010) 育て支援「つどいの広場」における相談のあり方に関する一考察 (Ⅱ)－大学サテライト施設における相談 (2007～2008年度) 分析を通して－ 心の危機と臨床の知 (甲南大学人間科学研究所編) 11 71-78
- 寺村ゆかの・伊藤篤 (2011) 子育て支援「つどいの広場」における相談のあり方に関する一考察 (Ⅲ)－大学サテライト施設でのアウトリーチ・サービス構築と相談実態・内容の整理－ 心の危機と臨床の知 (甲南大学人間科学研究所編) 12 95-104
- 寺村ゆかの (2008) 活動情報② 大学と行政が協働したまちづくりの拠点 子育て支援施設「のびやかスペース あーち」の取組 (兵庫県) We Learn 女性と学習・次世代育成情報誌 (財団法人・日本女性学習財団) 660 10-11
- 寺村ゆかの (2010) 早期からのドロップ・イン・サービス利用を促進させる一手法としてのペリネイタル・アウトリーチ・サービス 子ども家庭福祉学 9 71-78
- 寺村ゆかの (2012) 神戸大学サテライトで提供される地域子育て支援拠点事業の評価研究－利用者を対象とした悉皆調査を通して－ 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 5 (2) 121-133
- 寺村ゆかの (2015) 子育てひろば新規利用者対象のコネクション・プログラムがプログラム参加者のエンパワメントに及ぼす影響 子育て研究 (日本子育て学会編) 5 9-20
- 津田英二 (2006a) 地域におけるインクルーシブな学び場づくりの可能性と課題 日本福祉教育・ボランティア学習学会年報 11 63-82
- 津田英二 (2006b) 支え合う人間 ヒューマン・コミュニティ創成研究センター編 『人間像の発明』ドメス出版 287-320
- 津田英二 (2010) インクルーシブな社会をどう実現できるか 研究紀要 (兵庫人権啓発協会) 11 29-43
- 津田英二監修・神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター編 (2011) インクルーシブな社会をめざして かもがわ出版
- 津田英二 (2012a) 「都市型中間施設」概念の可能性～インクルーシブな社会をめざす社会教育実践のために～ 生涯学習・社会教育研究ジャーナル 5 1-17
- 津田英二 (2012b) 「場の力」を明らかにする 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 19 34-43
- 津田英二 (2012c) 物語としての発達／文化を介した教育 生活書院 (全301頁)
- 津田英二 (2014a) 語りが意味をもつ場の創出へ：障害の問題の社

会的共有に向けて 年報・教育の境界 11 61-75

津田英二 (2014c) 地域の中で共に育つ・育てる環境をつくる ふくしと教育 17 16-19

津田英二・伊藤篤・寺村ゆかの・井手良徳 (2012) 「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」実践の意義と課題－「のびやかスペースあーち」利用実態調査単純集計からの考察－ 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 5 (2) 173-185